

正確な診断で選手も守る

ラグビーリーグワン1部の静岡ブルーレヴズでチーフドクターを務める。磐田市立総合病院の整形外科部長として患者の治療にあたりながら、同市に本拠地を持つチームのシーズン中の12～5月は、週末の試合に同行。選手のけがやアクシデントに備える。

スポーツ選手はもちろん、普段の患者にも心掛けているのは「まず正確に診断することが最も大事」ということ。浜松医科大学を卒業して付属病院に入局し、最初に教授に言われた言葉だ。正確な診断ができれば、次の検査や治療も、迅速、確実に進められる。

スポーツ選手の場合は特に、迅速さが求められる。試合でけがをした選手から、いの一審に聞かれることは「来週の試合に出られますか」。2日後には次戦に向けた練習が始まる。肉離れか、損傷は広がっていないか。試合当日に判断を迫られる場合も多い。

静岡市駿河区出身で、自身もラグビー経験者。幼少期に元選手のパが指導していたスクールに参加し、興味を抱いた。静岡高でラグビー部に入部。高身長を生かしてロック（フォワード）として活躍した。ただ、タック

磐田市立総合病院（静岡県磐田市）

整形外科部長

猿川 潤一郎さん（47）



ルなどの接触が多い競技。けがとは常に隣り合わせだった。

付属病院の整形外科医となった2005年、専門を膝や下肢のスポーツ医学に決め、「いずれはスポーツチームに携わりたい」との憧れは強くなった。当時はラグビートップリーグ創生期。現磐田市立総合病院長の山崎薫さんに競技経験をかわれて誘われ、前身のヤマハ発動機ジュビロのチームドクターに加わった。

選手は一つのプレーに命懸けだ。軽いけがなら強行することもある。その判断については「彼らの気持ちもくんで最終的



患者の体の状態を確認する猿川さん

に決めるが、長い目で見て、選手生命や引退した後の生活を頭に入れる」と強調する。特に脳振とうは、疑われた時点で必ず止める。判断力が医師の真価でもある。

19年ワールドカップ（W杯）日本大会でも海外選手をサポートした。「選手だけでなくコーチやトレーナーら、いろんな職種とつながりを持てるのもうれしい」。今は一人のファンとしても、競技を下支えしている。

（荒木正親）